

うれしい中国映画

ジャーナリスト
松本侑壬子

私事ながら、テレビで好きな娯楽番組は、子どものお使い番組と欽ちゃん(萩本欽一)の仮装番組。子どもから大人、老人まで、一緒に楽しめるいい番組だと思う。

この仮装番組は中国でも放映されていて、愛好者がいるらしい。この映画のチャン・ヤン監督は、きつとその一人。日本のテレビ番組をこういう風に「活用」して、心の温まる素晴らしい人間ドラマが中国の監督の手で作られ、世界中で、とりわけ日中で多くの人に見られるのはうれしい。近年とげとげしさを増す「政治上の日中関係」とは裏腹な、涙と笑いにあふれた人間同士の共感がある。これぞ映画の醍醐味だ。

妻を亡くしたグオさんは、友人のチョウさんの勧めで老人ホームに入居するが、元気がない。何とか励まそうと、チョウさんは人気テレビ番組「仮装大賞」への出場をホームの仲間に提案す

る。初めての挑戦に、みんな大乗り気。本当は家族と一緒に暮らしたい思いを押し殺して、規則の厳しいホームでおとなしく暮らすのには、もう飽き飽きしていたのだ。

段ボール箱のパイを被って大勢で演じる「マジヤン」、一人と三人が向き合っただけで同じ動作で見せる「三面鏡」など、みんなでわいわい工夫を重ね、知恵を絞る。欽ちゃんやドリフターズの番組をほうふつとさせる場面が楽しい。天津での国内大会で三位までの入賞チームには、日本での本大会への出場権が与えられるとあって、みんな大張り切りだ。グオさんもいつしかチョウさんとともにみんなの中心的存在になっていく。だが、「何かあつては責任がとれない」とホームの院長や家族からは、出場を止められてしまう。老人らは一計を案じ、廃車置き場からおんぼろバスを借り出し、ホームを脱走、一路天津へ……というコメディ仕立て

で話は展開する。大会で司会者に「六人で五〇〇歳」と紹介される場面があるが、ホームの老人らを演じるのは、現代中国映画の至宝ともいえるべき名作の監督や国民的俳優など往年の名優らだ。老いへの怖れ、不安や孤独、家族への心残り、悔恨などそれぞれの老人の秘めた心のひだを眼差しひとつで表現する。どうしても三位以内に入賞したいチョウさんには、陽気な顔の裏に、日本に八年前に行つたきりの娘に会いたいという願ひがある。それというのも、実は末期がんに罹つており、いつまでこうしていられるかわからないという事情がある。グオさんも、実の息子との決裂という心の傷を抱えている。

旅についできた孫にスズメの寓話に託して親の気持ちをせつせつと語る場面。バスを追う車の中で若い女性院長が同世代の家族に、今後二〇年間に親と一緒に過ごせる日数を計算して見せる場面。人ごとでなく見る者の胸を打つが、これはまた現在の中国が直面する切実な高齢化問題を象徴的に反映しているという。一人っ子政策の影響もあり、二〇三〇年には中国は日本を上回る高齢化社会になると予測されるというのだ。映画は、こうした社会の実情をユーモアと優しさを込めて描いている。ラストの涙は温かい。



『グオさんの仮装大賞』

中国映画(104分)

監督:チャン・ヤン

出演:シュイ・ホアンシャン、ウー・ティエンミン 他

1月11日よりシネマート新宿ほか全国ロードショー

©2012 Desen International Media Co.Ltd